

ごあいさつ

日本レジャー・レクリエーション学会

会長 坂口 正治

(東洋大学 名誉教授)

本学会は、令和2年度の学会大会で、50回大会を迎えることになります。

諸先輩方のご指導と会員の皆様のご支援により、今日を迎えることができましたことに感謝申し上げます。

また、今回、本書を会員の皆様のご協力とご支援により、発刊することができましたことは記念すべきことであります。この機会に居合わせた幸運を、会員の皆様とともに心から喜びを分かち合いたいと思います。

思い起こせば、私が学会に入会した時の「学会案内」には、日本レジャー・レクリエーション学会とは…との案内から始まり、「レジャー・レクリエーションに関するあらゆる科学的研究をなし、レクリエーション学の発展をはかり、レクリエーションの実践に寄与することを目的として、昭和46年3月に設立された日本学術会議所属の学術団体です。」と記されていました。

まさに今、学会設立時の目的に向かって活動してきた事実がみごとに開花し、より充実した研究活動が実践されています。

学会は、「レジャー問題、レクリエーション研究に直接たずさわる研究者、専門家はもちろんのこと、レクリエーション環境、組織、指導など、実践家の統合体であるともいえましょう。」と示しています。

このような背景から、学会の取り組みはますます期待されています。また、今日の社会からの要望として、働き方の見直しや余暇活動の充実とその要求も多岐にわたっているように思います。

そこで、本学会でも、社会の要求に対応しうる研究活動の充実と他の研究分野との連携(産学官連携)など、学際的な研究を進めていくことが重要課題と考えます。

このような時期に、本学会として『レジャー・レクリエーション用語集』を発刊することは、会員はもとより、多くの皆様に活用していただき、より一層、レジャー・レクリエーションを深く理解していただくことが大切であり、本学会としての使命でもあると考えます。

最後になりましたが、会長として多くの諸先輩のご指導とご支援をいただき、会長職を全うすることができました。心より感謝申し上げます。

また、学会の発展は、会員の皆様のご支援とご協力なくして成り立ちません。今後とも、よろしく申し上げます。

発刊に寄せて

日本レジャー・レクリエーション学会
副会長 沼澤 秀雄
(立教大学 教授)

この度、2019年度の学会事業として「レジャー・レクリエーション用語辞典」を発刊する運びとなりました。日本レジャー・レクリエーション学会の目的は、言うまでもなく、学会会則の第1章、第2条にあるように、レジャー・レクリエーションに関する調査研究を促進し、レジャー・レクリエーションの普及・発展に寄与することにあります。本学会は、研究会発足から55年間、日本レクリエーション学会発足から49年間、日本レジャー・レクリエーション学会に名称が変更になってから29年間の月日が経過して、増減があったものの安定して学会員300名を数える学術団体として、学会を運営しています。学会の名称を、レクリエーションからレジャー・レクリエーションに変更したことで、学会は広範で多岐にわたっていた研究分野が、さらに広がり、「遊び」、「余暇活動」、「野外教育」、「スポーツ」、「生活」などを基盤にした体育学、教育学が中心だった研究領域が「自然」、「都市開発」、「造園」等が加わり、造園学、観光学、社会学などの研究領域とともに、まさしく学際的な研究者集団となっています。

また、1964～1995年までの学会活動をまとめた『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み』で、当時の浅田隆夫会長は、Leisure and Recreation を Leisure and Recreation Life と捉えており、Life には「生命」、「生活」、「生きがい」の3つの内容があり、これまでは個人の問題として考えられていたが、21世紀におけるL/R生活の問題解決は社会の問題としてとらえる研究姿勢が重要だとしています。

このように、多くの分野の研究者が様々な研究領域の問題を複合的に研究できることが本学会の強みではないかと考えられます。そのためには、多分野の専門用語を整理して、適切に論文に使用する必要があります。ここまで本格的な用語辞典は、あるようでなかったということを考えれば、本書はレジャー・レクリエーション研究を志す研究者にとって、とても便利で必要な専門書としてご愛用いただけるのではないかと思います。

おわりに、本書の刊行にあたり、ご尽力いただいた学会事務局の皆さんに感謝の意を表するとともに、これからのレジャー・レクリエーション研究の発展に本書が少なからず貢献し、本学会会員のみならず、様々な分野で活動する研究者の道標になることを期待して、発刊のご挨拶といたします。

レジャー・レクリエーションとは

日本レジャー・レクリエーション学会 (JSLRS)

前会長 鈴木 秀雄

(関東学院大学 名誉教授 Ph.D.)

社会福祉法人磯子コスモス福祉会理事長)

『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み－1964～1995－』（学会誌、第32号1995年11月刊）発刊時は理事長として関わり、『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み～その2～－1996～2010－』（学会誌、第66号2010年11月刊）発刊時には会長として、そして本書『レジャー・レクリエーション用語辞典』発刊にあたっては、前会長として「レジャー・レクリエーションとは」を記す機会をいただきました。学会発足時から関係し、自身の基幹学会としての存在ですから、この学会により、むしろ自らが育てられてきた感があります。改めて、皆さんの努力により、学会が継続的發展を遂げていますことに感謝の思いでいっぱいです。

学会が発刊する本書を通して、真のレジャー・レクリエーションとは何かを理解する“さすが（縁／因／便）”になればと願っています。

ここではレジャー・レクリエーションを理解するための要点を概説したいと思います：

レジャーの語源は、スコーレ（ギリシャ語）とリセーレ（ラテン語）の二語から派生しています。これらは本来、「労働を有しない自由で許されている身分や状態（これがリセーレの意味）」であり、「建設的で教育的・学問的な意味合いを持つ活動（これがスコーレの意味）」を示しています。スコーレはスクールの語源でありリセーレはライセンスやリパティの語源でもあります。

また、レジャーには三つの機能が存在します。①休養・休息としての**回復機能**、②気晴らし・娯楽としての**発散機能**、③自己開発・自己啓発としての**蓄積機能**です。当然、ボランティア活動も、社会参加・社会貢献を意味するもので、労働でもなく、強制でもないことからしてもレジャー（余暇）の蓄積機能の中に存在します。

端的に概括すれば、レジャーとは、「義務的、強制的、拘束的でない、所謂、自由裁量の“時間”であり、“意識”であり、“活動”である」と言えるのです。

レクリエーションとは、単なる遊び（Mere Play）から創造的活動（Creative Activity）までを含む一連の段階的な広がり（Spectrum）の中にあって、①余暇（レジャー）になされ、②自由に選択され、③楽しむ（おもしろさを含む）ことを主たる目的としてなされる活動（Activity）であり、**歓娛**（よろこび楽しむこと）の状態（State of Being）をいいます。これら①②③の要素はレクリエーションの三つの不可欠な条件にあたります。

レジャーとレクリエーションとの関係を理解する一助として、例えば、外側の枠組みである外延、即ち、^{つくり}構造であるレジャーという器（あるいは水槽）の中に、レクリエーションという料理（あるいは金魚）が内包としての機能^{はたらき}を担っていると捉えることもできます。当然、金魚は、水槽から外へ飛び出してしまうと、最早、生き続けることはできません。レジャーの中にレクリエーションが存在することは明らかです。

レジャーの構造の中で、その機能としての具体的な事象（やくわり）として、レクリエーションが現れるのです。勿論、レクリエーションは活動や状態として現れますが、人間活動形態の全て（認知的領域＝あたま、情意的領域＝こころ、神経筋的領域＝からだ）に及びます。

現代社会におけるスポーツの捉え方も、時代とともに変遷してきていますが、スポーツの語源を繙けば、“本来の仕事から心や体を他に委ねる身体運動と運動競技”ですから、レジャーという構造の中で、その働き（機能）としての身体的活動がレクリエーションとして起これば、それこそがスポーツと言う名の下で実施されていることとなります。

繰り返しますが、レジャー・レクリエーション・スポーツの三語を語源の繙きから、その概念の広がりや整理すれば、一番広い概念のレジャーの中にレクリエーションがあり、レクリエーションの中の身体領域としてスポーツが位置しています。

^{とき}時代の流れと共に社会が変化すれば、用語そのものが有する本来の意味も移り変わります。社会の必要性（Needs）や欲求（Wants）も、時代と共に変化するなかで、今後も人々のレジャー・レクリエーション・スポーツの捉え方が多岐・多方面にわたることは論を待ちません。本書が皆さんの活動、生活、研究等、様々な領域において活用されることを願い、また、本書がレジャー・レクリエーションの知られざる力の啓発に役立つことを期待します。

はじめに

本書は、レジャー・レクリエーションの指導者や研究者、レジャー・レクリエーションに関心のあるすべての皆様に、少しでも役立てていただきたいと願って、日本レジャー・レクリエーション学会の先生方を中心にまとめていただいた「レジャー・レクリエーションの基本用語集」です。

レジャー・レクリエーションを理解するための基本用語を掲載し、わかりやすく解説しています。つまり、レジャー・レクリエーションの指導・実践・学習に欠かせない用語をしっかりと定義し、共通理解がもてるように心がけてみました。もちろん、レジャー・レクリエーションの指導者だけでなく、興味のある方、ボランティアや学生の皆さんにも役立つように、丁寧に編集しています。

内容は、伝統的な用語から最新の用語まで、レジャー・レクリエーションに関する基本用語をしっかりと掲載し、わかりやすく紹介しています。レジャー・レクリエーションを理解する上で、関係者が共通理解を図っておく必要がある用語について、しっかりと収録していますので、きっと「レジャー・レクリエーション」理解に役立つことと思います。また、巻末には、付録として、レジャー・レクリエーションに関するトピックスやQ & A も収録しています。

編集にあたっては、「わかりやすい構成」「具体的なレジャー・レクリエーションの内容から学ぶことで、多くの知識が自然と身につく構成」「レジャー・レクリエーションや教育などの指導現場ですぐに役立つ」ように配慮しました。

レジャー・レクリエーション指導者やリーダー、ボランティアを目指す皆様にも役立つ本書を、是非ご一読ください。

2020年2月

日本レジャー・レクリエーション学会 理事長 前橋 明
(早稲田大学 教授・医学博士)

本書の特徴

「レジャー・レクリエーション」理解に最適な一冊、五十音順索引で引きやすい用語集にしています。

- 「レジャー・レクリエーション」に関連する基本的な用語の意味が理解できるように、教育・研究や指導実践、環境づくり等を目指す多くの方々のために企画されました。
- レジャー・レクリエーションにおける基本的な用語の解説を実現した用語集です。レジャー・レクリエーションの内容を、わかりやすくコンパクトに解説するように心がけました。
- 読者の理解が少しでも深まるように、トピックスや Q & A のコーナーも設け、工夫をこらしました。

凡 例

特色

- ① レジャー・レクリエーションに関する伝統的な用語から最新の用語までを取り上げた。全用語目数は、507 項目である。
- ② 読者の理解が少しでも深まるように、トピックスや Q & A のコーナーを設けた。

配列

- ① 項目は、五十音順で配列した。
- ② 外国語項目は、カタカナ表記で配列した。
- ③ 促音・拗音は一字と見なした。また、長音は母音と見なした。
例：シーソー（しいそう）

項目

- ① 用語には、英語表記を併記した。
- ② 遊具・環境などに関する項目には、図版を挿入した。
- ③ 執筆者名は、末項に（ ）で囲んで示した。
- ④ 外国人名には、（ ）内に生没年を付した。
- ⑤ 外国語の略語がある場合は、（ ）に囲んで示した。

索引

- ① 索引は、すべての用語を五十音順に並べ、総目次としての意味をもつように作成した。

文献

- ① 用語について、さらに理解を深める手助けとなる書籍を、執筆者が選定し、文献として掲げた。
例：【前橋 明：元気な子どもを育てる幼児体育，保育出版社，2015.】
例：【スポーツ六法編集委員会編：スポーツ六法，道と書院，pp.115-117，2003.】
- ② 引用文献には、著者・編者名：タイトル，出版社，ページ，出版年. を明記した。